

注意点1

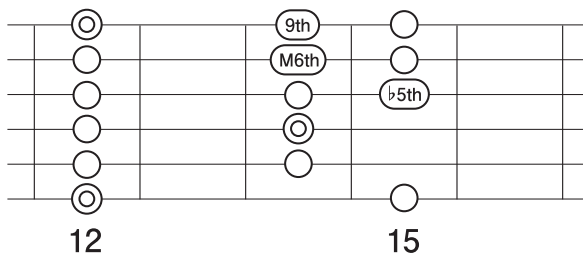


押さえやすさを重視した ボール・ペンタトニック

まずは、このフレーズで使われているスケールを確認しよう。このスケールは、ポール・ギルバートがよく用いているもので、Eマイナー・ペンタトニックをベースに、3弦15フレットのB $\flat$ 音(♭5th音)、2弦14フレットのC $\sharp$ (M6th音)、1弦14フレットのF $\sharp$ 音(9th音)の3音を加えたドリアン的な構成になっている(図1)。ここでポイントになるのが、3つのテンション音を1～3弦にしか使わないこと。あくまでもペンタをベースにしているの、1～3弦だけにしか音を加えない、押さえやすいポジショニングとなっている。1～3弦はすべて12 & 14 & 15フレットを鳴らすことができるので弾きやすいだろう。

図1 ポール・ギルバート風変則的
Eマイナー・ペンタトニック・スケール

◎ ルート音=E ♭5th音=B $\flat$ 音 M6th音=C $\sharp$ 音 9th音=F $\sharp$ 音



注意点2



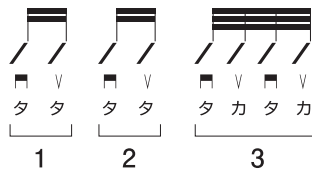
ズレて聴こえる1拍半の リズムに惑わされるな!

3小節目では、ポール・ギルバートが得意とするリズムがズレて聴こえるポリリズム的なフレーズが登場する。符割りが細かいので驚いている人もいると思うが、リズムの規則性を理解すれば、それほど難しくない内容だ。このフレーズの場合では、3小節目1拍目ウラから1拍半のリズムがくり返されている(図2-a)。つまり“16分音符4つ”と“32分音符4つ”が組み合わさっているのだ。口で歌うと“タタ・タタ・タカタカ”となり、ピッキングは図2-bのようになる。ただし、ここでは1拍目ウラからこのリズムがスタートするので、弾き始めの3連フレーズでリズムが崩れないように注意しなければならない。

図2-a 3&4小節目のリズム



図2-b 1拍半リズムのピッキング



注意点3



弦跳びフレーズでの 人差指セーハは禁止!

1 & 2小節目では、アウトサイド・ピッキングが多数登場するので、弦を飛び越えて下からアップ・ピッキングで弾く感覚をしっかりと養ってほしい。特に2小節目のポールが得意とする弦跳びアウトサイド・ピッキングは難易度が高く、右手だけではなく左手の弦移動にも注意しよう。このようなポジションでは、3 & 4弦12フレットを人差指のセーハで弾きたくて(写真①)、音の切れが悪くなり、さらにノイズも増えるので避けたい。各音でしっかりと人差指を移動させるように押弦しよう(写真②)。3 & 4小節目は、注意点2で触れたリズムを理解し、的確にポジションを押さえながら弾こう。



人差指による3弦12fの押弦時。直前の4弦12fと合わせて、人差指のセーハによって押弦してはならない。



3 & 4弦をセーハすることなく、各弦ごとに押さえることで、音の切れが良くなり、ノイズを減らすこともできるのだ。